

M-GTA研究会 News Letter No. 123

ニューズレターは、発表者の学びやSVのコメントを加えた研究の概要等を掲載したものです。

M-GTAに関する学習の素材となるものです。ご活用ください。

また、記載された研究概要は未発表のものであるため、取り扱いには十分ご注意ください。ご自身の学習以外での活用、転載、SNSでの公開、第三者への共有といった行為は禁止しています。ご理解とご協力をお願いします。

<目次>

◇第18回修士論文発表会	1
--------------------	---

【第一報告】

佐藤 友彰／大企業でボトムアップ型新規事業開発に取り組む担当者の意志形成プロセスの質的研究

1. 発表の過程を通しての感想や学び	2
2. スーパーバイザーのコメント	2
3. 研究の概要	3

【第二報告】

山本 築／キリスト教を信仰するアスリートにおける宗教的信念が競技生活に与える影響

1. 発表の過程を通しての感想や学び	9
2. スーパーバイザーのコメント	9
3. 研究の概要	10

【参加者の感想】	12
----------------	----

◇近況報告	12
-------------	----

◇次回のお知らせ	13
----------------	----

◇編集後記	13
-------------	----

◇第18回修士論文発表会

【日時】2025年7月19日（土）

【会場】ハイブリッド開催：大正大学764教室／ハイブリッド(対面及びZoom開催)

【第一報告】

佐藤 友彰(慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科修了)

Tomoaki SATO : Master's program graduate of the Graduate School of System Design and Management,
Keio University

大企業でボトムアップ型新規事業開発に取り組む担当者の意志形成プロセスの質的研究

A Qualitative Study on the Motivation Formation Process of Employees Engaged in Bottom-Up New Business Development within Large Firms

1. 発表の過程を通しての感想や学び

このたびは、昨年に続き M-GTA 研究会の修士論文発表会に参加させていただく機会をいただき、誠にありがとうございました。昨年度は、M-GTA という方法論についてほとんど知らない状態で、手探りのまま発表させていただいたにもかかわらず、参加されていた先生方から非常に温かく、かつ本質的なアドバイスを頂戴し、大きな励みとなりました。

今回の発表では、その際の助言をもとに、M-GTA について自分なりに理解を深めながら修士論文を完成させ、その成果を報告させていただきました。当初は「前回よりは少し成長した姿をお見せできたのではないか」という淡い期待もありましたが、実際に研究会でのフィードバックを受ける中で、依然として自分に足りていない視点や配慮すべき点が多くあることを痛感しました。

とりわけ、自身の研究がどの学術領域に属し、どの理論的な蓄積との対話の中に位置づけられるのか、という「研究領域の明確化」については、ほとんど意識が向いていなかったことに気づかされました。私の所属する研究科は学際的な性格を持っており、「ひとつの学術分野に根を張って議論する」というスタイルとはやや異なる文化があったことも影響しています。しかしながら、学術的な対外発表の場においては、学問領域を明確に定め、その中での先行研究との関係性を丁寧に示す必要があることを、今回改めて学びました。

また、M-GTA を「データを起点に理論を構築する手法」として捉えるあまり、先行研究との対話を軽視してしまっていたことも反省点のひとつです。M-GTA の結果として見えてきた構造や概念が、既存理論とどのように異なり、どのように貢献し得るのかという視点がなければ、学術的な意味づけが不十分となってしまいます。いわゆる IMRAD 形式を意識した構成力や、理論的貢献の位置づけを自ら言語化する力が、未熟であると実感しました。

さらに、質的研究を進める上での「言葉の扱い」についても、多くの示唆を得ることができました。量的研究においては、数値による正確な測定や統計処理が中心となる一方で、質的研究は人間の語りや経験といった非常に繊細な言葉というものを扱う分析、営みであり、一つひとつの言葉に対する向き合い方や意味の解釈の仕方にこそ、研究者としての力量が問われることを改めて実感しました。昨年に比べれば、自分なりに「言葉を丁寧に読む」「定義づける」という姿勢を持てるようになったと思いますが、今回の研究会での議論を通して、まだまだ足りていないということも強く感じました。

それでも、研究会を通じてさまざまな先生方から頂いたコメントは、今後の研究をより発展させていくための大きなヒントとなりました。私自身、この研究成果を必ずしも論文という形で公表することにこだわっているわけではなく、むしろ現場での実践や実務において活用されることを重視しています。そのため、今後この研究をどう位置づけ、どう「収めていくか」は、改めて考え直したいと思いました。

最後になりますが、今回 SV をご担当いただいた岸田先生に心より感謝申し上げます。また、研究会の場だけでなく、懇親会などの非公式な場面においても、参加された先生方から非常に親身な助言や励ましのお言葉をいただけたことにも、深く感謝しております。さらに、昨年からの継続的に研究相談に乗ってくださった林先生、隅谷先生にも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。このような温かいコミュニティの中で、自身の研究を育てていけることを大変ありがたく思っております。今後も、皆さまからいただいたご助

言を糧に、より一層探究を深めてまいります。誠にありがとうございました。

2. スーパーバイザーのコメント

岸田 泰則（法政大学）

本研究は、大企業の新規事業の担当者その業務に取り組む意志を形成していくプロセスを明らかにするものであり、新規事業を推進するうえで組織の支援について実務的な示唆を与える可能性を秘めており、実践的な価値を有する調査研究といえる。大企業に勤務するボトムアップ型の新規事業開発の担当者という調査協力者を確保できたことに敬意を表したい。実は、社会科学の領域では企業から、あるいは企業勤務者から調査研究の協力を得ることが年々難しい作業となっている。なぜならば、情報漏洩リスクやコンプライアンス意識の高まり、SNS によるレピュテーション・リスクが懸念されるからである。また、人手不足により業務多忙によるリソース不足が増大している一方、研究倫理審査による文書取り決めの煩雑さが増しており、そのようななか研究の実用性やメリットをアピールできないといった側面も原因として挙げられる。そういった背景のなか、大企業専用のインキュベーション施設である「ARCH 虎ノ門ヒルズインキュベーションセンター」の協力を得たことは特筆できる。また、その結果、事業立ち上げ経験のある8名に研究の意義や価値を説明できた点は高く評価したい。

一方、学術論文として仕上げていく点でいくつかの課題を指摘させていただいた。第1に、リサーチ・クエスション(問いの設定)において、学術的などの学問領域のその理論に貢献する研究が不明である点である。研究は、巨人の肩に乗る作業であり、その学問領域の理論になんらかの知見を積みかさねること、貢献することが求められる。研究テーマの設定において、先行研究レビューを丹念に行うことが必要となる。すなわち、先行研究レビューの作業からリサーチ・ギャップを指摘し、そこからリサーチ・クエスションへ進む必要があることを指摘した。そして、社会科学や経営学で使用されているリサーチ・クエスションという言葉は、M-GTA では研究テーマに相当すると考えている。リサーチ・クエスションすなわち研究テーマと分析テーマの関係は、研究テーマは研究計画に対応して設定され、分析テーマはデータに対応して設定される(定本, p.74)ことになる。

第2に、言葉の定義を明確にする必要がある点も指摘した。本研究の重要な概念である「意志」の定義を操作的に定義する必要がある。先行研究での「意志」の定義を紹介されてあるが、先行研究の定義の説明から本研究の定義へつながる論述が求められる。また、発表では「意志」と「意思」の両方を使っているが、この2つの言葉の弁別性の説明も必要となる。いずれにしる、質的研究においては、使用する言葉への敏感なことが求められる。言葉への敏感さとは、言い換えれば、言葉を尊重し、謙虚である姿勢とも言えよう。

第3に、社会科学系のジャーナルでは、論文執筆形式として IMRaD (Introduction 導入、Methods 方法、and、Discussion 考察)が採用されることが多く、量的研究者のなかにはこの IMRaD が唯一のものと思っている研究者も多いことを紹介したが、質的研究はその限りではない。しかしながら、論文の初めから最後まで、先行研究の理論に対してどのような問いを立て、その結果、どのような知見を付加したのかといった、一本の論理の筋を明確にする必要があることをお伝えした。

いずれにしる、質的研究を社会科学系のジャーナルに投稿する際にも、定本の表 12-3(pp.332-333) 質的研究論文査読ガイドライン は重要な示唆を与えてくれる。このガイドラインの1は課題の設定であり、2は問いの設定である。そして 3 は十分な文献検討である。最後に、学術ジャーナルへの投稿においては、先行研究レビュー、リサーチ・ギャップの提示、リサーチ・クエスションの設定がとても重要であることを指摘しておきたい。

3. 研究の概要

1) 研究の背景

企業内で新規事業開発を専門的に行う企業も増え、新規事業開発が特定の人に限られた取り組みではなく、誰もが担う可能性のある職務となっている。

そのような中、企業内で新規事業に取り組む担当者(いわゆる企業内起業家)に対して、初期段階から「強い意志」が求められる傾向に、筆者は違和感を覚えた。独立起業家とは異なり、企業内起業家は必ずしも自らの希望でその職務に就くとは限らない。会社の方針や人事異動により新規事業開発に配属されるケースも少なくなく、組織の一職務として従事しているに過ぎない場合もある。

このような状況の中、主に新規事業開発を担当する者向けに、「自分軸発見ワークショップ」や「Will 発見ワークショップ」など、自身に隠れた内発的な意志を“見出す”ことを目的とした支援も展開されているが、それらがかえって本人にとって心理的な負担となることもある。近年では、「Will ハラスメント(Will ハラ)」という言葉が示すように、意志を持つこと自体が半ば義務化され、過度に問われ続ける風潮への懸念も表出している。

大企業において新規事業開発に携わってきた自身の経験から、こうした「意志の前提化」に対する違和感を抱いた。不確実性の高い”新規事業をあきらめずやり続ける”には「意志」が重要な役割を果たすこと自体は理解する一方で、それを初期段階から明確に有しているべきだとする見方には懐疑的である。

むしろ、「意志」とは、業務遂行の過程における多様な他者との関わりや相互作用を通じて、徐々に醸成されていくものではないか。このような問題意識を出発点とし、企業内起業家の意志形成がいかにして立ち現れていくのかを探究したいと考えた。

2) 先行研究

意志(volition)は、行動開始後の困難や障壁を乗り越え、遂行を維持する心理的メカニズムとされ、行動の起点となる動機(motivation)とは区別されてきた(Heckhausen & Heckhausen, 2018)。特に企業内起業家のような長期・不確実な業務においては、動機-行動ギャップを埋める意志の理解が重要である。

先行研究となる、動機研究分野においては、目標設定理論や期待-価値モデルなどで理論の積み上げがされてきたのに対して、意志に関する枠組みは発展が限られている。たとえば Kehr(2014)の3Cモデルは、動機間の葛藤を意志によって補完する構造を示しているが、意志の形成過程や社会的文脈への言及がなされている研究は乏しい。Rubiconモデル(Heckhausen & Gollwitzer, 1987)は意志を「計画～行動」フェーズに位置づけているが、動的な更新プロセスには踏み込んでいない。Kuhl(2000)のPSI理論も、意志をセルフコントロールとセルフレギュレーションに分けているが、組織内でどのようにそれらが引き出されるかは明らかではない。

また、企業内起業家に関する既存研究に目を向けても、組織構造や経営支援など環境要因(Bouchard & Basso, 2011)や、個人の性格・上司の支援(Parker, 2011)などを行動の要因として示しているものはあるが、意志について言及した研究は私が見た限り少なく、意志そのものが、多様な相互作用を通じてどのように醸成・再生成されるのかという点は、理論的にも実証的にも十分に扱われていない(Blanka, 2019)。

3) 研究の目的

先行研究は組織環境や個人特性が企業内起業家の行動を左右することを示してきたが、意志 (volition) が社内外の相互作用の中でいかに醸成・再生成されるかは未解明である。本研究は、この「個人レベル × 意志形成プロセス」の空白を埋めることを目的とし、大企業でボトムアップ型新規事業を担う担当者を対象に、意志が ①多様なステークホルダーとの相互作用を通じて強化され、②長期的不確実性の中で発現するメカニズムを質的に解明する。これにより、Volition 理論を拡張するとともに、企業内起業家研究に意志形成の視点を導入し、実務的には「Will ハラスメント」を回避しつつ意志形成を支援する組織支援手段の設計へ貢献することを狙いとする。

4) M-GTA に適した研究であるか

以下の理由により、M-GTA に適した研究であると判断した。

- **プロセスを把握する研究であること**

本研究は、意志の形成過程を明らかにすることを目的としており、プロセス性のある現象の分析に強みをもつ M-GTA の枠組みが有効である。

- **文脈を重視した分析が可能**

日本語の文脈依存性や暗黙的意味を扱ううえで、M-GTA の文脈重視のアプローチは、企業内起業家の語りの解釈に有効である。

- **実践現場での活用を志向する**

M-GTA は現場応用を志向した理論構築を特徴としており、実務的示唆の抽出を目的とする本研究との親和性が高い。現場への成果の還元も期待される。

5) 分析テーマへの絞り込み

本研究における分析テーマは、“社内新規事業創出に挑む担当者が、あきらめずに事業を立ち上げるまでのプロセス”である。本稿では「事業を立ち上げるまで」とは、売上が実際に計上され始めた段階ではなく、売上創出に向けた実行フェーズに移行できるだけの準備 (製品・組織体制・社内承認・外部リソース等) が整い、実装を開始できる状態 (Go サインが出た段階) を指す。

6) 分析焦点者の設定

本研究における分析焦点者は、大企業に所属し、ボトムアップ型で新規事業の立ち上げに取り組む新事業開発担当者とした。ここでいう「担当者」とは、意思決定層としてのマネジメント層ではなく、実際に現場で業務を推進するプレイヤーとしての実務担当者を指す。

7) 方法論的限定

企業における新規事業創出のアプローチは多様であるため、本研究における対象を限定する。対象とする「新規事業」は、アンゾフのマトリクスにおける「既存市場 × 既存製品」以外の全領域 (市場開拓、製品開発、多角化) とし、社内リソース活用を起点とするボトムアップ型新規事業開発を分析対象とする。

トップダウン型の新規事業開発は、経営層の指示命令が支配的であり、担当者本人の内発的な意志形成プロセスは、ボトムアップとは異なると判断したため、本研究の対象から除外した。

8) インタビュー対象者の選定

インタビュー対象者の選定にあたっては、都内にある大企業専用のインキュベーション施設の協力を得て候補者を募った。その中で、既に、事業立ち上げ経験のある 7 名に対して、60 分のインタビューを実施し、そのデータを用いて M-GTA による分析を行った。

9) 結果の概要

以下に分析の結果として、ストーリーラインなどについて記す。文中【 】はカテゴリ、〈 〉はサブカテゴリ、「 」は概念、『 』はバリエーションを示している。

a ストーリーライン

“社内新規事業創出に挑む担当者が、あきらめずに事業を立ち上げるまでのプロセス”は、以下のように解釈された。 ”大企業に所属し、ボトムアップ型で新規事業を立ち上げようとする新事業開発担当者”は、業務を進める中で、【この業務をさせてくれる会社への恩義】を抱き始める。この感情は、会社が担当者に不確実性の高い挑戦を許容し、その機会を与えてくれたことに対する感謝、会社の期待に応えるため自分しかできない問題に立ち向かおうとする使命感と、その実現が会社のためになるという会社への貢献の心理が複雑に絡み合って形成される。そして、この感情が担当者に【それをやることに対する腹落ちと覚悟】をもたらす。それこそが、新規事業に取り組んでいく原動力、すなわち新規事業に取り組む意志である。しかし、実際に事業開発に向けた行動を進めようと試みる中で、担当者は〈社内理解の獲得〉や〈支援者の獲得〉をすることの難しさに直面する。これらの壁を乗り越えながら、担当者は、会社の【制約の中での実現手段の獲得】を進めていく。会社内でのルールや、制約の中で、創意工夫を重ね、現実的な解決策を模索していく。また、【挑戦を支え合う社外の同士との対話】がプロセス全体を下支えする重要な要素として機能している。担当者は「社内に答えが無いことへの気づき」を経験し、自信を失いかける場面で、同じ課題に向き合う他社の担当者との対話を通じて精神的な支柱を得る。また、自社だけでは対応が難しい部分を補間するための協力関係の構築にも、この対話が役立つ。こうしたプロセスを通じて、担当者は困難を乗り越え、新規事業を社内で立ち上げていく。

b 意志の形成について

新規事業開発では、担当者は高い不確実性の中で価値創造に挑む。顧客課題を捉えるため、担当者は現場に足を運び「顧客からの反応の早期取得」に努める。『だから当然相手(の抱える問題＝自身の仮説)がこうじゃないかなと思った時に、その現場があるならば行っちゃうし、(その現場で)働いてみるのもあるし(Aさん)』のように、自ら体験を通じて検証を重ね、「顧客の反応から正解じゃないことを知る」ことで学びを更新していく。

しかし、試行錯誤の中で「顧客の役に立たない現実の受け止め」にも直面する。『聞けども聞けども、これいらねえですねとか〜(Eさん)』という指摘を受けながら、「価値を届けられる顧客の見極め」、PoC などの反応から「顧客の反応を通じた手応えの獲得」へとつなげていく。

その過程では、「やりたいこととやれることの(再)認識」が求められる。『困ってるのは、お前じゃなくて主婦だろと。僕らの商品買ってくれてるお客さんがやっぱ1番困ってることに、その要請に応えることが、なんか僕らの存在価値だ。って言われて。僕、なるほどなって、僕もう腑に落ちちゃって。(Hさん)』のように他者の視点が内省を促し、やるべきことへの理解が深まる。『いまこれやることに喜んでいいのかもしれないなと思ったし、その人たちに一定数受け入れられてるんであればと思ってやりました。(Eさん)』と語られるように、顧客に受け入れられる経験は「進めていく勇気を持つこと」へとつながる。さらに『自分たちがやらなきゃ〜(Bさん)』という言葉に示されるように、担当者は「会社に還元できることの確信」を得ていく。

一方で、『会社からの評価って別にそんなに意味があるものじゃないけど、評価されたってことに自信を持ってしまって(Eさん)』のように「会社評価は当てにならない」現実にも気づく。『結局、だから

全然知らないんだな～(Bさん)』という言葉が示すように、「社内に答えが無いことへの気づき」を得て、「自分しかできない」ことへの使命感を抱いていく。

このような経験を通じて、担当者は【この業務をさせてくれる会社への恩義】を感じるようになり、その感情が次第に【それをやることに対する腹落ちと覚悟】へと変化する。この腹落ちと覚悟こそが、新規事業を推進するための原動力であり、担当者の意志の核心となるのである。

10) SVを受けての変更点

SVでは、本研究を論文として対外発表することを念頭に、以下の助言を受けた。

第一に、論文構成をIMRAD形式(Introduction, Methods, Results, Discussion)に沿って整えること。第二に、研究が対象とする学術領域を明確にし、その領域における先行研究や理論との間に存在する研究ギャップを明示すること。第三に、概念やカテゴリー名は体言止めとし、一人歩きできる独立性の高い名称とすることである。

このうち、先行研究とのギャップ明確化について、追加の文献調査を行い発表に盛り込んだものの、依然として学術領域の特定が十分でなく、発表当日も領域設定に関する指摘を受けた。

11) 当日いただいたアドバイス

大きく分けて、以下5点のアドバイスをいただいた。

* 本記事の研究内容は、いただいたアドバイスの反映は未実施

a 研究領域の明確化とギャップ設定

この研究の学術領域(例:経営学/組織論/アントレプレナーシップ)をまず特定し、その領域の先行研究を主に参照して研究ギャップを絞り込むこと。考察はその領域の先行研究や理論との対比で展開する。同じような概念について考える場合でも、研究領域ごとに、参照する理論が異なる。

b 用語・定義の厳密化(「意志/意思」や「恩義」)

「意思」ではなく「意志」と書いたところには想いもあるはず。区別するならば、その意図を論理展開すべきであるし、先行研究から引用するのであれば、それと言葉の定義を整合させるべきである。結果で用いた「恩義」も、分析過程での導出根拠や、定義を明確化する。質的研究は言葉の研究なので、言葉を大切にすることが必要。

c インタビューガイドの設計

インタビューで「意志」を直接問う難しさがあることは理解できる。先行研究にて、本研究で明らかにしようとする事との関連が述べられている概念について、インタビューで意図など工夫が必要。

d 分析テーマの適正化(データ近接&焦点化)

「事業立ち上げまでのプロセス」といった広い設定ではなく、研究で解きたい焦点に合わせデータに近い距離で分析をする。テーマを「意志の立ち上がりプロセス」などへ絞り込む方がよい。過度に広いテーマは論旨のブレにつながる。

e 結果図

結果図が綺麗に見えすぎていて、意志が形成されるまでの、迷いや、動き、その難しさのようなものが表現されていないように感じる。分析が足りていない部分がある可能性がある。

f 章立て

プレゼン／論文構成を IMRAD に沿って整理する。とくに Discussion では先行研究との一致／相違／拡張を論じ、実務者からの反応や事例コメントは Results 側に配置するべき。

12) 分析を振り返って

これまで質的研究に取り組んだ経験がなく、当初は M-GTA の考え方そのものの理解や、実際に「言葉进行分析」ということに大きな難しさを感じていました。特に、先生が定本の中で述べられている「違うけれど同じ」を見つけて概念として統合していくという思考や、いわゆる「生成型」の思考法は、私にとって非常に新しく、理解すること自体に多くの時間を要しました。最初の頃は、分析の方向性も定まらず、実際に手を動かしてもなかなか感触が掴めずに苦労した(正確には、挫折しそうになった)ことを覚えています。

しかし、何度も定本を読み返し、分析をやり直すことを繰り返す中で、少しずつではありますが「こういうことなのかもしれない」という感覚が芽生えてきました。今振り返ってみれば、全く分析ができなかった初期の段階からは一歩進むことができたのではないかと思います。

分析には終わりが分かりにくく、「分析結果を確定する」ことを自分自身のテーマとの対話の中で判断していく必要があるという点は、量的研究との大きな違いであり、難しさでもありました。数字が出ればある程度完結する量的な分析とは異なり、質的研究は自らの解釈と向き合い続ける姿勢が求められるため、時間的にも精神的にも根気のいる作業でした。

それでも、最初は手探りで始めた分析を、少しずつ形にしていく過程は、私にとって貴重な学びであり、自身の思考の幅を広げる大きな経験となりました。

意味を解釈し、それを言語化していくという行為自体が、理系のバックグラウンドを持つ私にとっては非常に新鮮な経験でした。これまでとは異なる思考の扉が開かれたような感覚であり、困難と同時に大きな面白さも感じました。このような研究手法に出会えたことそのものが私にとっては大きな実りでした。この考え方は、研究に限らず実生活においても応用可能であると実感しております。

13) 主な引用文献

- Blanka, C. (2019). An individual-level perspective on intrapreneurship: A review and ways forward. *Review of Managerial Science*, 13(5), 919-961.
- Bouchard, V., & Basso, O. (2011). Exploring the links between entrepreneurial orientation and intrapreneurship in smes. *Journal of Small Business and Enterprise Development*, 18(2), 219-231.
- Camelo-Ordaz C, Fernandez-Alles M, Ruiz-Navarro J, Sousa-Ginel E (2012) The intrapreneur and innovation in creative firms. *Int Small Bus J* 30:513-535.
- Heckhausen, J., & Heckhausen, H. (Eds.). (2018). *Motivation and action*. Springer.
- Heckhausen, J., & Gollwitzer, P. M. (1987). Thought contents and cognitive functioning in motivational versus volitional states of mind.
- Kehr, H. M., Strasser, M., & Paulus, A. (2018). Motivation and Volition in the Workplace. In J. Heckhausen & H. Heckhausen (Eds.), *Motivation and Action* (pp. 819-850). Springer.
- Kuhl, J. (2000). A Functional-Design Approach to Motivation and Self-Regulation: Theoretical integration and empirical implications.
- Parker, S. C. (2011). Intrapreneurship or entrepreneurship? *Journal of business venturing*, 26(1), 19-34.
- 木下康仁. (2020). 定本 M-GTA: 実践の理論化をめざす質的研究方法論.

【第二報告】

山本 築(日本体育大学 スポーツ心理学研究室)

Kizuku YAMAMOTO (Nippon Sport Science University, Sports Psychology Laboratory)

キリスト教を信仰するアスリートにおける宗教的信念が競技生活に与える影響

The Influence of Religious Beliefs on the Athletic Lives of Christian Athletes

1. 発表の過程を通しての感想や学び

本研究は、自身の信仰体験を起点に、M-GTAを用いてクリスチャンアスリートの語りを分析するという初めての試みに挑戦したものでした。発表を通して、自らの経験を言語化する困難さと、それが他者の理解や共感につながる意義を再認識しました。また、先生方からのフィードバックを受け、概念の明確化やストーリーラインの調整など、より深い理論構築に向けた視点を学ぶことができました。さらに、全体を通じて、自身の分析技法や質的研究に関する理論的理解がまだ十分ではないことを再認識しました。今後は、M-GTAに関する文献の読み込みや、他者の分析との比較・検討を通して、よりの確かつ理論的な分析を行えるよう知見を深めていきたいと考えています。本発表の機会を通して、研究を「形」にして提示することの意義を見出すことができました。同時に、自身の研究が学問領域の中でどのような位置づけにあるのかを改めて確認する必要があることにも気づかされました。また、本研究を通じて明らかにしたいことは何か、そしてその結果を誰に・どのように返していくのかという視点についても、今一度立ち止まって見つめ直し、今後の研究の方向性をより明確にしていきたいと考えています。

2. スーパーバイザーのコメント

坂本智代枝(大正大学)

本研究は、ご自身がキリスト教を信仰するアスリートである経験を基盤に発想されたもので、スポーツ心理学のみならず、宗教社会学や文化人類学的視点からも意義深いテーマです。特に、多様性や宗教的背景を尊重する重要性が高まる現代日本社会において、アスリートが信仰を持ちながら競技に臨むプロセスを可視化することは、競技現場や教育現場での支援の質向上に資するものと考えられます。

今回SVを担当するにあたり、発表当日前からレジュメや分析資料を早めに準備していただき、オンラインおよびメールで複数回のやり取りを通して、分析の精度を高める作業を行いました。

【発表前のSV】

発表前には、研究背景の記述をより厚くするよう加筆を依頼しました。背景部分の充実、研究の意義と問いの説得力を高めるために不可欠であり、既存研究との接続や社会的文脈の提示が重要です。

また、「分析テーマの絞り込み」に至る過程について、最初に着目したデータ、そこからテーマ設定に至った思考の流れを明確化するよう求めました。

さらに、データ収集範囲(方法論的限定)については、分析の始点と終点をはっきりさせることを提案しました。もしテーマが「信仰をもちながら競技生活を続けていくプロセス」であるならば、インタビューの中でどこからどこまでを対象とするのかを明確化することで、分析の一貫性が保たれ深い解釈につながると思います。

【発表当日のSV】

当日は、分析したワークシートを提示していただき、最も着目した概念から説明を受けました。分析では、

データに密着しながら理論化を進めることが求められます。そのため、詳細な事例から概念を抽出し、並行して関係図を作成しながら分析を進めることが重要です。

現状では、すべての概念を抽出してから分類する手順を取っており、そのために現象の動きや変化のプロセスが結果図に十分に表れていない点が惜しまれます。

コアとなるデータはすでに見えているため、その部分から再度分析を深め、関係図を描き直すことで、より動的で説得力のある分析結果となるはずです。

また、ワークシートには対極例がきちんと明記されていますが、そのバリエーションの概念化が十分ではありません。これにより、「信仰をもちながら競技生活を続けていく」際に生じる葛藤や影響が十分に描ききれない印象を受けます。データの中にはすでにその萌芽が見られるため、ここを掘り下げることで分析の厚みが増し、研究の独自性が際立つと考えます。

【全体を通して】

SV を通じて最も感じたのは、「研究する人間」としての立場からデータとの適切な距離感を保つことの重要性です。ご自身がクリスチャンアスリートである経験を持つがゆえに、経験的に自明と感ずる部分がデータ解釈から抜け落ちる可能性があります。こうした「暗黙の前提」を意識化し、あえて他者視点から再検討することが、理論化を一層深化させる鍵となります。

また、他者との相互作用の中で生じる意味や変化を意識して分析することで、単なる経験談の集積にとどまらない、普遍性を持つ理論構築が可能になります。

本研究は、今後のスポーツ現場におけるメンタルサポートや多文化共生の理解促進に寄与し得る意義があり、さらなるブラッシュアップによって大きな学術的価値を持つものになると考えます。

3. 研究の概要

1) 研究の背景

現在、多様性への理解が進みつつある日本社会において、宗教的背景を考慮した社会の構築は喫緊の課題の一つであるといえる。このことは、スポーツ界においても例外ではない。Ronkainen et al. (2020) は、宗教が競技生活に影響を及ぼし、アスリートのキャリア形成や主観的幸福に重要な役割を果たす可能性があるとして指摘している。日本における宗教文化は、世界の宗教文化と比較して独自の特徴を有している。日本では、仏教や神道といった伝統的宗教が生活の中に自然に溶け込んでおり、儀式、祭礼、慣習といったかたちで宗教的要素が文化的・社会的営為の一部として受容されている(島菌, 2011)。このように、宗教が明確な信仰としてではなく、生活習慣の中に埋め込まれているという特徴は、日本社会における宗教的実践の理解や認識のあり方に大きく影響している。宗教は、人々の行動や価値観に影響を及ぼすとされているが(Czech et al., 2004)、競技生活において宗教的慣習や信念がどのように作用しているのかについては、国内では未だ十分に明らかにされていない。このような状況に至っている背景には、日本固有の宗教観や宗教文化の特性が影響していると考えられるが、同時にそれは、スポーツ界における宗教理解の希薄さをも示唆しているといえる。宗教的信念が競技生活に与える影響を明らかにし、信仰をもつアスリートが円滑に競技活動を行うための環境を整備するには、宗教とスポーツとの関係性に関する研究が不可欠である。特に、日本固有の宗教文化的文脈を踏まえつつ、宗教的価値観とスポーツ文化の調和を図るための理論的・実践的枠組みの構築が求められる。

2) 研究の目的

多様化していく社会で多様な宗教的ニーズに対応するには、信仰をもつアスリートの信仰に対する理

解を深めることが求められる。そこで本研究の目的は、わが国でクリスチャンアスリートの宗教的信念が競技生活に及ぼす影響について検討することとした

3) M-GTAに適した研究であるか

・プロセス性

本研究の主題である「信仰と競技生活の両立」は、固定された状態ではなく、日々の経験や関係性の中で変化していく動的な現象である。クリスチャンアスリートが競技生活においてどのように信仰と向き合い、調和を図るのかというプロセスを解明することを目的としており、M-GTAはこのプロセス性を捉えることができるため適切であると判断した。

・社会相互作用

M-GTAは、対象者が他者(人や組織、さらには本研究における神など)との関係性の中でどのように意味を見出し、行動を調整しているのかを捉える相互作用を備えている。本研究においては、アスリートが神や教会、チームメイト、家族などとの相互作用を通して信仰をどのように維持し、競技生活にどう活かしているかが重要な焦点である。したがって、社会的関係性や相互作用の文脈を分析枠に含められるM-GTAは、本研究の問いに合致する分析手法である。

・実践的理論の構築

M-GTAは、対象者の語りから実践につながる理論を構築することを目的としている。本研究では、信仰をもつアスリートが置かれている環境や課題を明らかにし、それをもとに実際の支援や制度設計に活かせる知見を提供することを目指している。そのため、現場の経験に根ざした“実践的で応用可能な理論”を志向するM-GTAは、本研究のゴールと整合する。

4) 分析テーマへの絞り込み

「信仰をもちながら競技生活を続けていくプロセス」

信仰と競技生活の両立をするうえで、対象者がどのような課題や葛藤を経験し、それらをどのように乗り越えていくのかというプロセスに焦点を当てることと判断された。信仰と競技生活という2つの異なる価値観の融合や対立がどのように個々のアスリートの生活や自己認識に影響を及ぼしているのかについて明らかにすることを目指している。

5) 分析焦点者の設定

「クリスチャンアスリート」

信仰をもつことで競技生活において特有の課題や葛藤を経験しながらも、それらを克服して競技生活を続けているクリスチャンアスリートとした。

6) 結果の概要

分析の結果、22の概念、4つのカテゴリとサブカテゴリが生成され、信仰と競技を両立するプロセスが構造化された。信仰を表明することへの葛藤、信仰の深化、競技の意味づけの変化、教会・信仰共同体からの支援といった段階が明らかとなった。

7) SVを受けての変更点

SVを通して、構成された概念の抽象度が高く、具体性に欠ける点が指摘されたことを受け、より詳細かつ具体的な概念の生成を行った。また、概念名についても、相互作用相手が明確でない名称が多かったため、アスリートが関わる「神」「教会」「チームメイト」などの相互作用相手が明確に把握できるような概念名へと修正を加えた。加えて、概念図において分析焦点者の「葛藤」が図式上で読み取りづらいという課題が挙げられたため、今後はその点を明確化するための修正を行っていく予定である。

8) 分析を振り返って

まず自らのデータの読み取り方の甘さを痛感した。特に、語りの中に現れる意味の含意を丁寧に拾い上げる視点や、文脈に沿って概念化していく力が未熟であることに気づかされた。概念生成の過程では、カテゴリーとなるものと構成概念との違いを明確に区別する難しさに直面し、それぞれの階層や役割を意識しながら概念を構成していく必要性を強く感じた。また、分析テーマの設定がいかに全体の分析の方向性や深度に影響を与えるかを実感した。初期の段階でテーマが曖昧であったため、焦点の定まりきらない概念化が一部に見られ、分析の中で繰り返しの再検討を要することとなった。加えて、ストーリーラインと結果図との関係性においても、構造的な整合性をもたせながら、読み手にとって理解しやすい可視化を行うには、さらなる工夫と熟練が必要であると感じている。

9) 主な引用文献

Czech D. R., Wrisberg, C. A., Fisher, L. A., Thompson, C. L., and Hayes, G. (2004) The Experience of Christian Prayer in Sport: An Existential Phenomenological Investigation. *Journal of Psychology and Christianity*, 23(1) : 3-11.

木下康仁(2020) 定本M-GTA-実践の理論化をめざす質的研究方法論. 医学書院.

島菌 進(2011) 日本人論と宗教 : 国際化と日本人の国民的アイデンティティ. 東京大学紀要論文, 13: 1-6.

Ronkainen, N. J., Ryba, T. V. and Tod, T. (2020) "Don't ever mix God with sports" : Christian religion in athletes' stories of life transitions. *Sport in Society*, 23(4) : 613-628.

【参加者の感想】

- ・結果図への意見を聞いて見方が少しわかりました。
- ・分析テーマの設定はとても重要であることを再認識しました。とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・修士課程在学中の研究スケジュール、インタビュー期間などをお聞きしたいなと思いました。
- ・分析だけでなく、インタビューガイドや分析テーマの設定に関わる重要な点を学ぶことができました。自身の研究への取り組みのイメージが具体的になったように思います。さらにグループディスカッションでは今の悩みに答えていただき、大変助かりました。ありがとうございました。

◇近況報告

(1) タイトル	(2) 氏名	(3) 所属	(4) 研究領域	(5) 研究に関するキーワード	(6) 内容
----------	--------	--------	----------	-----------------	--------

- (1) 論文が掲載されました
- (2) 安井 秀仁
- (3) 立命館大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程
- (4) 発達障がい、対人援助職、就労継続支援
- (5) 発達障がい当事者、対人援助職、就労継続要因、青年期、インタビュー調査、M-GTA

- (6) このたび、発達障がい当事者である対人援助職従事者の就労継続要因に関する研究論文2本が『ピア・サポート研究』第21号に掲載されました。

掲載論文

「発達障がい当事者である対人援助職従事者の就労継続要因の検討Ⅰ－青年期へのインタビュー調査から－」(pp.11-22)

「発達障がい当事者である対人援助職従事者の就労継続要因の検討Ⅱ－青年期へのインタビュー調査から－」(pp.57-69)

本研究では、発達障がいの診断を受けながらも対人援助職として働き続けている方々に焦点を当て、青年期の方々へのインタビュー調査を通じて就労継続要因を検討しました。M-GTAの手法を用いて分析を行い、当事者の視点から就労継続に寄与する要因を明らかにすることができました。

研究を通じて、発達障がい当事者が対人援助職として働く際の困難さと同時に、その経験が持つ独自の価値や強みについても理解を深めることができました。特に、当事者研究の視点だけではなく、質的研究として当事者自身がM-GTAを運用できたことに付加価値を感じています。当事者である研究者が自らの立場性を活かしながら、同時に学術的な質的研究の手法を適切に用いることで、より深い理解と洞察を得られたと考えています。

今後は、この研究成果をもとに、より実践的な支援方法の検討へと発展させていきたいと考えています。また、M-GTA研究会にはまだ参加したことがありませんが、ぜひ参加させていただき、同じ手法を用いている研究者の皆様との交流を通じて、さらなる学びを深めていきたいと思っております。M-GTAという手法の奥深さと可能性を改めて実感しており、研究会での議論や交流を通じて、今後の研究をより一層発展させていければと考えています。

◇次回のお知らせ

○第105回定例研究会

日時:2025年10月4日13:00～

会場:オンライン:Zoom

◇編集後記

2025年は歴史に残る暑い夏となっています。この編集作業を行っている9月もまだまだ残暑が厳しい状況です。日本各地では、線状降水帯や台風・竜巻などで多くの方が被害に遭われています。心よりお見舞い申し上げます。日々の生活を見直し、少しでも地球温暖化を食い止める行動を努力しようと考えています。

ニューズレターNo.123をお届けします。今回は修士論文発表会の内容です。2人の発表者がともに、自身の研究が学問領域の中でどのような位置づけにあるのかを改めて確認する必要性を、認識しておられました。その学問領域における先行研究との検討をとおして、本研究の意義が明確になることからとても大切なことであると感じます。このように、発表後にニューズレターを読むと、発表者が発表前のSV・発表・発表後の懇親会をとおして、何を学んだかがわかりとても勉強になります。どうぞ、ニューズレターを活用し、M-GTAに関する理解を深めていただけたらと、願っています。(唐田順子)

世 話 人:阿部正子、今井朋子、唐田順子、菊地真実、岸田泰則、坂本智代枝、佐川佳南枝、隅谷理子、
丹野ひろみ、都丸けい子、長山豊、根本愛子、畑中大路、林 葉子、平塚克洋、山崎浩司
(五十音順)

相 談 役:小倉啓子、小嶋章吾 (五十音順)

名誉会員:青木信雄、小倉啓子、木下康仁(故人)、水戸美津子 (五十音順)

編集・発行:M-GTA 研究会
研究会のホームページ:<https://m-gta.jp>
問合せ先:研究会事務局アドレス office@m-gta.jp